

精神科医の思うこと④⑩

岩手と宮沢賢治

松村 奈奈子

実は私のルーツは岩手県なんです。父親が3歳の頃亡くなったという私の祖父は、岩手から大阪に出てきたと聞きました。私の旧姓はかなり珍しい名前で、岩手に数百件しかなく、読み方も難しく、生まれ育った大阪では子どもの頃から「何て読むんですか？」「変わったお名前ですね」と言われ続けてきました。大学生の頃、家族でとりあえず「ルーツ探しの旅」でもするかと盛岡に行った時は、本当に岩手がルーツなのかしら？と急いで電話ボックスに入り電話帳をめぐりました。すると、そこには同じ名前が数十件あって「ああ、同じ名前の人がたくさんいる！」「ここがルーツなんだ」となんだか嬉しかったのが忘れられません。

そんなご縁もあってか、関西からは遠いんですが、ふらっと盛岡一人旅を試してみたり、夫婦で花巻温泉に行ったり、精神科関連の学会が岩手であると魅かれるように岩手を訪れてしまいます。そして岩手と言えば宮沢賢治。数年前の学会も、昨年の秋に参加した学会も、毛色は異なるのですが、いずれも宮沢賢治を絡めた話を学会長がされ、秋の学会ではテーマにもなっていました。岩手での宮沢賢治の存在感の大きさに驚きました。

そんな岩手の秋の街を散歩しながら、なんだかいろいろ考えさせられたので、今回のテーマは岩手と宮沢賢治。

私が宮沢賢治に初めて触れたのは、岩手ではなく兵庫県の田舎町の母方祖父母宅でした。その仏間に、大きな額で「雨ニモマケズ・・・」の詩が飾ってあったのです。毎年帰省すると仏間で寝泊まりするのですが、いつも眠る前にお布団から眺めて「よくわかんないけど、なんだかスゴイ詩だなあ」と小学生の私は思っていました。この詩を書いたのはどんな人なんだろう？どんな人生を歩んだ人なんだろう？と想像するのが面白かったです。そして、小学生の終わる頃にはそらで言えるようになっていました。しかし、他の家族は興味も無いようでこの詩について話題に出る事はなく、先日、母親や弟に聞くと「そんな詩あった？」と言われました。いやー、文化的素養の無い家で育ちました。

なので私も、気にはなっていたけれど「雨ニモマケズ・・・」の詩が宮沢賢治の作品だと理解した

のは、恥ずかしなからずいぶん大人になってからです。さらに、宮沢賢治の作品に興味を持ちだしたのも、岩手を訪れるようになってからです。

中学生頃の私はなんだか詩を書くのが好きになり、中学生向けの雑誌に詩を投稿して賞をもらった事があります。しかし、父母の反応は今ひとつで、一番喜んでくれたのは祖母でした。大学生の頃には、祖母は「ボケ防止だから」「返事はいいよ」とよく手紙をくれました。私は時々しか返事を書かなかったのですが、祖母が亡くなった時に、私の詩が賞をとった時の雑誌と私の手紙とがひとつの箱に入って大事にとってあるのを見た時、じんときました。ふりかえると、「雨ニモマケズ・・・」の詩は、読書家だった祖母が買い求めて飾っていたのだと思います。大正時代生まれの祖父はワンマンで、今でいうDV的な一面もあり、家族に暴力があったと母親から聞いたことがあります。あの詩を祖母が選んだのには、いろんな思いがあったのかなあと想像しています。祖母とは亡くなるまで「雨ニモマケズ・・・」の詩について話す事は無かったです。今思うと、「あの詩のどんなところがおばあちゃんは気に入っているの？」と聞いてみればよかったと思いますが、祖母の人生を考えると、あの詩について誰にも話さずひとりで受けとめたかったのかなあとも思っています。

数年前の学会は精神司法関係の学会だったのですが、岩手出身の宗教学者である山折哲雄氏がゲストで登壇し「雨ニモマケズ・・・」の詩にある「デクノボー」について講演されました。いやあ、その時に初めて、あの詩にはそんな意味があるのかあと感動しました。

ちなみに「雨ニモマケズ・・・」の詩は、宮沢賢治とかけてググると全文閲覧できます。

昨年秋に参加した学会は「日本死の臨床研究会」という会で、歳をとって死を意識するようになった私が気になっている分野です。テーマは「“あめゆじゅ”を求め、向き合い、そして支える」で、宮沢賢治の「永訣の朝」という詩のなかの「あめゆじゅとてちてけんじや(雨雪をとってきてください賢治兄さん)」のフレーズからの引用でした。恥ずかしい話ですが、宮沢賢治フリークではない私、「永訣の朝」という詩を初めて知りました。ググるともちろん全文閲覧できるし、高校の教科書に採用されるなど、有名な詩でした。死にゆく妹が、そばで何もできずに寄り添っている兄である賢治にお願いをするという場面を書いた詩です。演者の解説を聞きながら、これまた深いなあと頷いてしまいました。賢治は、質屋のような商いをする両親とは裕福だけど分かり合えない部分が多く、妹トシとの関係が深くなっていったと聞きました。トシの「雨雪をとってきて欲しい」という兄賢治への依存は、逆にトシに何かしてやりたいという賢治の気持ちを満たす・・・という妹トシの深い思いを兄賢治が言葉にした詩ともとれる事です。

この詩の話聞きながら、そうそう、そうなんだよねと、精神科での診察場面を思い出していました。精神科を受診される患者さんの中に、家族や友人誰にも相談せずに受診される方がいます。精神科医ではありますが、こんな見ず知らずのオバサンに相談するより、まず自分を思ってくれている人に相談したらどうやねん、と思うケースがあります。そんな患者さんは口をそろえて「迷惑をかけたらアカンし」「家族を心配させたくないから」と言います。「逆に家族や友

人が困っている時に、自分に相談してくれなかったらどんな気持ちになりますか？」と問い返すと「それは、さみしい」と言います。「では、人に相談されたらどんな気持ちですか？」と聞くと、「相談してくれると嬉しい」「頼ってくれるのはイヤじゃない」と話します。

そうなんです、人は信頼する人に言葉で依存するので、依存するという事は信頼している存在だと認識させる事でもあるんです。もちろん、ハチャメチャ家族で「家族が信用できない」という事もあると思います。でも、友人や恋人は自分で選んだり選ばれたりするので、家族でなくてもいいので、まず信頼できる人に言葉で依存してみる事は、相手に迷惑をかけるのではなく、信頼している証であり、相手に喜びを与える事なのだと言っています。

その後、ほとんどのケースは家族や友人に悩みや困っている事を話して楽になったといい、言葉で親しい人に依存するだけで、症状が良くなることをよく体験します。

もちろん、死にゆく最愛の妹との関係でおこる言葉でのやりとりは究極であり、私が診察の場面でであうレベルとはずいぶん異なる事なのかもしれませんが、信頼した相手に言葉で依存する事は、大切な事だと再認識させられました。

死の臨床の場面では、仕事ではあるけれど関わっている我々と、亡くなりゆく人の間で、言葉を介してお互いが「じーん」とくる場면을体験しているのではないかと思います。私もまた緩和ケアの専門ではないけれど、総合病院勤務の頃は死にゆく人の診察を通して、信頼されて依存される言葉で逆に助けられた事を思い出しました。

宮沢賢治は彼の死後に多くの作品を評価されたので、著名な文学者などがさまざまな解釈を発表するなど、いやあなかなか謎が多い。ゆえに、熱烈ファンがいるんでしょうね。実は旦那が「ほとんど読んでないけど・・・好きなんだよなあ」と宮沢賢治全集を大切に持っていたり、北海道のふらっと入った小さな町のカフェの本棚に宮沢賢治全集があり、店主が熱く宮沢賢治について語り、宮沢賢治記念館にいった話で盛り上がりなどなど、気になる存在です。

いやーそういう私、現代小説が好きなので、宮沢賢治をぜんぜん読み込んでません。しかし、岩手を訪れる度に、宮沢賢治に触れて考えさせられています。

むかしむかし、祖父はどんな気持ちで岩手から大阪に来たのか、それは父親も知らないと言っていました。今、孫の私はなぜだか岩手に魅かれて、今年の夏休みは岩手に行こうかなあと言っており、旦那の宮沢賢治全集を開いてみようかなあと思っています。